

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | <p>言語:</p> <p>出版者: 高良倉吉</p> <p>公開日: 2009-03-03</p> <p>キーワード (Ja): 沖縄県多良間島, 伝統的社会システム, 八月踊り, 琉球, 水納島, スツウプナカ (豊年祭)</p> <p>キーワード (En): Tarama Island, Okinawa Prefecture, Traditional society, Dance of August (8-gatsu odori), The Ryukyus, Minna island, Sutsuupunaka(celebration of a full harvest)</p> <p>作成者: 高良, 倉吉, 池宮, 正治, 山里, 純一, 玉城, 政美, 川平, 成雄, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 大胡, 太郎, Takara, Kurayoshi, Ikemiya, Masaharu, Yamazato, Junichi, Tamaki, Masami, Kabira, Nario, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Ogo, Taro</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p> |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027</a>   |

# 多良間島の口頭伝承をめぐる若干の考察

## —多良間の「伝説」二題—

鈴木寛之\*

はじめに

日本の民俗学においては、口頭伝承の研究は多くの場合、口承文芸研究という領域内で行なわれてきた。ここでは地域社会に受け継がれてきた口伝の文芸、具体的には昔話・伝説・世間話に加えて謎・諺・唱え言・命名などが研究対象となる。また、これら散文的な形式のものに対して、語り物・口説き・民謡・童唄など韻文的なものもひろく口承文芸の範疇に含まれる。

以上あげた各項目のうち、民俗学研究史上、質量ともに長く口承文芸研究の中心を成して来たのは昔話・伝説の二分野であった。このうち昔話は、語り方に一定の形式をもち、架空の登場人物が不特定の時代に活躍する物語であって、聞き手もおよそ空想的な内容であることを承知のうで語りを楽しむ性格のものである。それに対して伝説の方は、地域社会ではイイツタエ・イワレなども称される内容のものであり、一般に、それが過去に地域社会において実際に起きた出来事に根ざしていると認識される点を特徴とする。さらに加えて、それが事実であったことを証明する木や石や水、塚、祠堂など伝説ゆかりの何らかの記念物が残っている場合が多い。

昔話・伝説に関する以上のような理解は、柳田国男氏以来、日本の民俗学における共通見解とされてきた [柳田 1990 (1947)] が、その一方で、こうした昔話・伝説を総称する民話という語も存在する。民間説話を略した語であり、戦後の民話劇・民話運動等を通じて一般的にも普及したもので、現在ではこれも術語として成立している。

### 1. 多良間の「伝説」の概況

ここではまず、多良間における口承文芸として、過去にどのような内容が報告されているのかを、特に「伝説」を中心として概観してみたい。

1960年に多良間を調査した上江洲均氏の報告には、「土原豊見親の伝説は多良間のあらゆる伝説の半数以上も占めている。… [中略] …いま多良間島から「土原豊見親」の伝説を取ってしまうならば、多良間の口承文芸は実にさびしいものになってしまうだろう。」

\* すずき ひろゆき 琉球大学法文学部助教授

[上江洲 1960 : 8] という記述があり、この状況は現在にも通じている。村内には、土原 ウガン、ピトマタウガン、ウプメーカ、1902 年（明治 35）に社殿造営となった多良間神社など、島を最初に統一した人物で、郷土の英雄である土原豊見親にまつわる拝所が各所に散見される。

1964 年の調査をもとにした中山盛茂氏「多良間の民俗」の報告文中にある「口承文芸」の項は、「伝説」11 例と「童歌（わらべうた）」とから構成されている。多良間の口承文芸の概況を述べた部分には「伝説は多い。孤立した島のためでもあろう。特にかわったものとして百合若大臣の物語、島立の話、漂流倚談等がある。特に多いのは島の統一をはかった土原豊見親（ンタバル、トヨミオヤ）の英雄物語である。」[中山 1966 : 179] とあり、特に土原豊見親に関しては「彼にまつわる伝説は島中の伝説の大部分を占めるもので何れも力量と頭脳の尋常でないことを示すものである。」[中山 1966 : 82] とある。

こうした多良間村内の口承文芸資料を集成した成果として最も代表的なものは、多良間村役場編集・発行（遠藤庄治氏監修）による『多良間村の民話』[1981] である。この資料蒐集のための調査が行なわれたのは 1978 年で、具体的には多良間民話の会・沖縄民話の会・沖縄国際大学口承文芸研究会が合同で調査にあたり、その際に蒐集された約 400 話の中から選ばれた 147 の「民話」と、それに加えて村に伝わる「ことわざ」とが刊本には収録されている。それまでも種々のかたちで記録されてきた多良間の口承文芸資料だが、それがここにおいてひと通り集大成された感がある。

本書に収録された 147 の「民話」は、構成としては＜動物昔話＞10 話型 13 話、＜本格昔話＞65 話型 69 話、＜笑話＞13 話型 14 話、＜伝説＞47 話型 51 話の 4 項目に分類・配列されており、より大きくみれば「昔話」「伝説」の 2 項目に大別されているといえる。

本民話調査団の団長を務め、かつ刊本の監修者でもある遠藤庄治氏は、同書の「解説」において「離島の民話のもつ重要さは、二つの性格にある。一つは、他の地域ですでに失われた民話を伝承している可能性がきわめて強いことであり、もう一つは、さまざまな民話の土着化である。」[多良間村役場編 1981 : 277] との指摘を行ない、多良間の場合それを具体的に例示すると「土着化という点で見逃せないのは、「話千両」が島の英雄嶺間按司の話として語られ、さらに「百合若大臣」が水納島の鳥塚に寄せて語られている点である。」[同前 : 279] と述べている。

口承文芸が「土着化」して「伝説」の形をとった代表的な事例としての、この二つの話例に関して、以下では、過去に出版された書物の上に表れたこれら「伝説」の内容について概観していくこととする。

## 2. 嶺間按司の「伝説」

多良間村教育委員会発行『村の歴史散歩』[1995] 巻末にある「多良間村総合年表」の書

き出しは、「洪武年間、嶺間按司多良間島に「神名遊び」を伝えたと言えられる。」という一文である。ここで村の歴史の第一行目に名を記された嶺間按司とは、多良間を統一した英雄土原豊見親よりもさらに前の時代、14世紀後半に活躍した人物だとされており、現在も字塩川の嶺間集落に位置する嶺間御嶽に祭神として祀られている。同書「伝説に残る人物と集落」の項の記述を引けば、嶺間按司とは「中国に往来して文物を取り入れ、神名遊びを伝え、「手が出れば気を鎮め、気立てば手を引け」の教訓を残すなどして住民の教化に努めたとされる」[渡好山編 1995: 22] 人物である。

嶺間按司の事跡に関しては、1727年の『雍正旧記』に「神名遊びの事」として記載がみられ(『多良間村史』第2巻 [1986: 30-31])、この内容が嶺間按司に関する記事の典拠になっている。ここでは、1745年成立とされる『遺老説伝』の記述を引いてその内容を概観してみたい[嘉手納 編訳 1978: 106-107]。

往古の時、多良間島、未だ宮古の轄地為らざるの時、嶺間按司なる者あり。宮古山豊見親に帰服し、時々宮古山に到り、以て聘問を為す。子年十月の間に当り、宮古山より故郷に帰回するのとき、半途に行き至りて、陡かに逆風に遭ひ、風に任せ浪に随ひて一处に漂到し、船、沙泥を衝く。而して其の国名を知らず。忽ち、崖上に布屋を張蓋し、男女聚会して、三昼夜の間、以て躍遊を為すを見る。皆人の姿に非ず、仙神に似たり。即ち船上の人、皆岸に向ひて拝礼祈福して曰く、船隻恙無く本国に帰り至れば、即ち神の踊舞に倣ひ、毎年必ず祭礼を為さんと。拝礼の言畢るや、恭しく神庇を蒙り、順風忽ち起り、潮水満漲し、船隻自ら浮く。即刻開船し、三日を歴閲して、早や多良間に到る。衆人大いに欣び、深く神恩を謝す。且つ以て神舞の似くせんとするも、惜しむらくは神舞の具無し。按司、衆人を率ゐ、海浜に出で至り、亦許願を為す。未だ数日を経ざるに、鷺鳥の尾羽・五色の珠玉及び彩櫛並びに花鼓等の、神棚崎に漂来する有り。即ち此の物件を獲、以て神舞の遊を為す。此れよりの後、子・丑・寅年に当る毎に、必ずや十月の間、吉辰を選択し、十三昼夜、恭しく祭品を備へ、男人二十名、芭蕉糸を將て白髪並びに鬚を作り、白衣を穿ち、大帯を結び、其の結帯の余は前へ垂るること数尺、神貌に仮粧す。而して棹几を座の正中に放在し、神司、其の棹上に立ち、北に坐りて南に向き、神歌を高唱す。其の余の人は、神司を囲み立ち、悉く皆櫛を打ち、以て神歌に和す。女人十名、皆白衣を穿ち、髪根は頭頂に結束して、其の余は後に垂る。又、白布を頭上に帯びて長く後に垂る。神司、亦其の正中に立ち、而して髪に五色の櫛を着し、頸に五色の珠を帯び、右手に鷺羽を持ち、而して左手に一杖藜を帯ぶ。既にして十三昼夜、男女各其の座を別にし、相与に神歌を唱和し、以て祭祀を為す。

嶺間按司が島に伝えたと言われるこの「神名遊び」は、中世には途絶してしまったものとされ、ここに記された以上には、明確な祭祀の内容も伝承として残されていない[多良

間村誌編纂委員会編 1973 : 68]。その一方、嶺間按司に関して、今なお村内でひろく知られている伝承といえ、嶺間按司が島に持ち伝えた「キムンデバ手ピキ、手ンデダバキムピキ」という格言に関する内容である。以下、『村誌たらま島』[1973 : 68-69] を引いて内容をみてみたい。

按司はある年、大立峯按司と航海中、唐の国に流された。二人は唐の王に拝えつし歓迎された。帰島の前に王は二人に、のぞみの物を土産にやろうといった。大立峯は船いっぱい黄金がほしいといい、嶺間按司は黄金よりも、何か教訓になることばがほしいといった。二人はそれぞれ、のぞみどおりの土産を王からもらった。嶺間按司におくられた教訓は「キムンデバ手ピキ、手ンデダバキムピキ」というものであった。「怒っているときは手を出すな、手を出したいときは怒りをおさえよ」という意である。

二人は船をナガサキ浜の沖に着け、別れて家路を急いだ。夜になっていた。嶺間按司は自分の家の入り口に立って妻の名を呼んだ。しかし、内からは返事がなかった。按司が戸のすき間からのぞくと、妻は男と同衾している様子であった。これを見た按司は怒りに燃え、腰の刀を抜いた。不貞の妻を切りすてようと思った。しかし、按司の頭には、このとき「キムンデバ手ピキ」という教訓がひらめいた。按司は唐の王からきかされたこの教訓を思い出すと、怒りをぐっとおさえ、刀をさやにおさめた。そして、妻をしずかに揺りおこした。妻は眼をさまして起きた。かたわらの男も起き出した。しかし、男と見たのは按司の実母であった。賊をこわさに男を同衾させて添寝したと妻は夫に事情を語った。

嶺間按司は妻の話をきくと、あわてて大立峯按司の家に駆けつけた。同じ事態が起きているにちがいないと思ったからであった。しかし、一足おそかった。大立峯按司は家族もろとも、鮮血のなかで、息絶えてしまっていた。この惨事をみたたん、按司は唐に向かって手をあわせ、王に涙をながして感謝した。

翌朝、嶺間按司は船着場のウーウリツツに行き、船いっぱい積みこまれている黄金を海中に投じて、大立峯按司の死出の旅への土産とした。このときから、ウーウリツツに生息するカニ類はどれもクガニアマン（黄金のカニ）と呼ばれるようになり、毒ガニがいなくなったという。

嶺間按司が「唐の王」から授かってきたこの「教訓」にまつわる話は、前述のとおり、今なお多良間でひろく伝承されており、嶺間御嶽拝殿内にも「気がたてば手を引け 手が出れば気を引け」と記された書が神訓として掲げられている。

『多良間村の民話』[1981 : 189-192] 収載の「嶺間御嶽由来」の話例では、二人の按司が船旅の途中に遭難して辿り着いた先は、唐の国ではなく「竜宮」となっている（話者は1900年（明治33）生まれの饒平名泰仁氏）。嶺間按司は、自分より先に遭難して竜宮に来

ていた妹と再会し、格言も竜宮での妹の主人から授かったという筋立てになっている。ただし、この話例を記した末尾には注記があり「竜宮訪問を伴う話型は、多良間でもこの一話だけで、他は、唐を出発する時、嶺間按司が、金よりも格言を聞いて帰った話になっている。」との断り書きがある。

この点をも考慮した結果なのか、『多良間村史』第6巻 [1995 : 212-213] に記された嶺間御嶽由来譚では、「話者」として『多良間村の民話』と同じく饒平名泰仁氏の名前が記されているが、按司二人の漂着した場所がどこなのか、具体的な場所は特定されておらず、単に「途方もない国に漂着した。」とだけ記されている。また同『村史』では、話の結末部が「嶺間按司は大立嶺按司のことが気になり、急いで行って見ると家族を始末して呆然として腕を組んでいる大立嶺按司の姿がそこにあった。大立嶺按司は生きて行く望を無くし、後の事を嶺間按司に託して、宝物を懐中に放棄し、そして自殺して果てた。」となっており、大立嶺按司の最期の様子がより明確に描写されている。

さて、先にも述べたとおり、この嶺間按司の遺訓についての伝承は、多良間で今なお広く知られているものだが、話の展開の仕方や登場する格言の内容についていえば、沖縄本島糸満市に祀られている御嶽、白銀堂にまつわる有名な由来譚と同一である。

このことについては『村誌たらま島』 [1973 : 69] でも既に指摘があり、「この伝説は糸満に伝わる白銀堂由来に似ている。とくに唐の王の教えたという教訓や、母と妻との同衾は全く同じだといえる。両伝説の根は一つであろう。しかし、いずれにせよ、前記の伝説からうかがえるのは、嶺間按司の島外での活躍と島民から尊敬されていたと思われる人格である。唐漂流は島外活躍をものがたるものであるし、教訓は按司の教養による理性をあらわしているといえる。いっぽう大立嶺按司は我欲にはしって亡びたということになる。」との付言がある。『多良間村史』第6巻 [1995 : 213] にも同様の注記がみられ、「「氣立てば手を引き、手が出たら氣を引け」との糸満白銀堂の由来話に類似しているが、この物語りはどちらが古いか、或はどうか、課題として残されている。」と記されている。

遠藤庄治氏による『多良間村の民話』の「解説」 [1981 : 192] では、昔話研究の立場からみたこの話の位置付けが明確に示されている。嶺間御嶽由来譚は、「全国に分布する「話千両」から派生した話型で、沖縄本島では、糸満の「白銀堂由来」として広く語られる話型と同じである。」という結論がそれであり、ひろく「昔話」として分布する話例が多良間では「伝説」化して伝承されているのだという判断により、この話は同書の中で〈伝説〉の項に収録されているのである。

一方の糸満市の白銀堂の方でも、研究者のあいだでは同様の解釈の仕方が一般的であるといってよい。『遺老説伝』では、白銀堂由来譚の末尾を「後人、因りて名づけて白銀岩と曰ひ、遂に威部と為して尊ぶ。」 [嘉手納編訳 1978 : 169] と締め括っており、福田晃氏の「糸満説話の伝承世界」 [1996 : 32] においても、この由来譚は「昔話「話千両」を伝説化して伝承するもの」としてとらえられている。

昔話「話千両」は、一名を「話買い」などとも称される。「昔話」としては世界的に分布

がみられる話型である。日本国内でも青森から沖縄までほぼ全国から事例が報告されており、その内容は、主人公がことわざを3つ買い入れる筋立てのものが多い。特に3つめのことわざである「短気は損気」は、ほとんど全ての話例に決まって登場している。

以下では、一例として『日本昔話名彙』[1948:182] 収載の、香川県小豆島の話例を紹介してみることにする。

昔、或男が女房と母とを国に残して他国で稼いで金を貯めて、何年ぶりに故郷へ還ろうとする時に、何かよい話を国への土産にしようと思って寺の住持に頼むと、三つの話を教えてくれた。一つは「人は寄っても身は寄るな」もう一つは「大木より小木」第三には「短気は損気」というので、初め二つの話のお蔭で生理めや落雷の難を逃れて無事帰宅する。家に入ろうとすると障子に映った影が女房と円い頭をした坊さんで、仲睦まじそうに話をしている。カッとして鎌に手をかけたが「短気は損気」を思い出して鎌を投出し家へ入ってみると坊さんと思っただのはわが母で、のぼせるので髪を剃っていたものであった。お寺の和尚の話は何より結構なお土産であった。

この話例は「昔話」として語られたものではあるが、話の後半部は糸満・多良間に伝承される内容と展開が同一であることがわかる。

### 3. ユリワカデーズにまつわる「伝説」

水納島には、鳥塚と称される石碑がある。その表面は摩滅してしまっており文字を読み取ることはできないが、この塚は、百合若伝説にゆかりのものとして知られている。

この伝説の文献上の初出は、1713年の『琉球国由来記』であり、島にある「旧跡」として「鷹ノ塚」が記されている(『多良間村史』第2巻[1986:249]所収)。次いで1727年の『雍正旧記』にも「鷹の墓所の事」として記事がある(同『村史』第2巻[1986:31]所収)。以下では1745年成立とされる『遺老説伝』によって、この「伝説」の内容を概観してみたい[嘉手納編訳1978:168]。

往昔の世、日本国人一名、宮古水納島に漂流して、此に栖居し、朝夕悲憂す。一日、鷹鳥の此の島に飛来する有り。其の人之れを獲るに、則ち素飼ふ所の鷹にして、翅に米粉袋有り。日本人、深く之れを奇異とし、亦故郷の心に感動して啼哭す。遂に一指を噛みて其の血を取り、硯・筆の二字を、袋上に書し、以て飛去に便す。未だ数日を閱せずして、鷹、硯筆を帯びて飛び来り、半途に気疲れ力倦れて、滄海に斃れ、石泊浜に漂来す。日本人之れを看、深く鷹の落死を惜しみ、而して此の地に葬る。此れよりの後、毎年鷹来れば、必ず墓上に聚集す。而して今の人之れを看、感動せざる者莫

し。

柳田国男氏は1925年（大正14）に刊行された『海南小記』の「海ゆかば」において、この「伝説」に言及している。「宮古の水納島にも、ほぼ同じような大和人の漂流談があって、これは百合若とはいっておらぬ。硯を負うて流れ着いた鷹の墓は、後世一つの霊場となっていた。秋ごとにこの墓の上には、多くの鷹が海を渡って来て休むので、永く新たなる感動を人に与えたということである。」[柳田1989（1925）：314-315]という記述である。同じ『海南小記』の「附記」に「多羅間は船の都合で干瀬の外まで往ってみた。水納の島も沖から眺めたのみであった。」[同前：522]と記しているように、柳田氏自身は多良間島を訪れてはいない。この「伝説」の内容も、典拠は『遺老説伝』等の文献から得たものと推測され、百合若に関わる内容はみられない。

1938年（昭和13）に水納島・多良間島を訪れた河村只雄氏は『南方文化の探求』所収の「水納の百合若物語」において、水納のユリワカデーズの「伝説」について詳しく記している[河村1999（1939）：212-216]。ユリワカは武勇に長けてはいたが「三度の飯より寝る方をよろこぶほどの寝坊」な人物であったという。ある時、ユリワカが居眠りしている最中に、競争者ウスワカの謀略によって島流しにされ、無人島であった水納に漂着するが、飼っていた鷹の働きによって都にいる妻との連絡が取れる。やがて島と都との往來を繰り返して力尽きた鷹を埋葬した後、偶然通りかかった船に救助されたユリワカが、帰京して愛妻と再会するまでの内容がここで詳しく紹介されている。

稲村賢敷氏[1957：57]は多良間で寝坊の者を意味する「ゆいあかで一ず」という言葉が、百合若大臣の意だとも解釈されていることに触れ、「水納島に伝っている鷹の墓碑に終る、やまと人の話しと関係があるようにもあり、又別個の事柄として考えてもよい、絶海の孤島に残された悲喜劇の一つである。」と述べている。

『日本残酷物語』第1部[1959]にも、水納島では朝寝坊の子供は年寄りたちからユリワカデーズと呼ばれて叱られたという記述があり、やはり寝坊したために島に置き去りにされた「百合若大臣」の話をふまえての呼称であるとされている。

1964年の調査をもとにした中山盛茂氏の「多良間の民俗」にも、「多良間島では朝寝坊や又昼寝して日の暮れるまでも知らずにねているような怠け者を「ユイアカデイス」と云って叱ることがある。其の理由を聞いてみると、昔ヤマト（日本）船が多良間島の近海を通り折しも夏のころで暑さが甚だしく飲料水が欠乏していたため島に上って水を求めた。百合若は島に上陸して緑の樹陰で休んでいると涼しい風が吹いて来たのでよい気持になり且つ長途の航海に俄に疲労が来て遂に昼寝してしまった。友達の者は皆飲料水を船まで運ぶと其のまま帆をあげて島を去ったので百合若は一人ねぼけて島に取りのこされることになった。「ユイアカデイス」は百合若大臣の意味だとも云っている。絶海の孤島に残された悲劇的の海洋物語の一つである。」[中山1966：179-180]という記述がある。

『村誌たらま島』[1973：112]では、この鷹塚の話は、「島の渡来人伝説」の項で取り上



げられている。「百合若は漂流中、水納島に船を着けた。木陰で昼寝をして疲れをとるともりだったが、三日三晩も寝てしまい、その間に家臣たちは百合若を残して郷里に帰ってしまった。このときから、島では朝寝や昼寝の過ぎる者を「ゆいあかで一ず」というようになった。」とまとめられている。

ユリワカが都から島流しにされたのか、水納島で置き去りにされたのかという細部の異動はあるが、大まかな筋はどれも同じである。

『多良間村の民話』[1981: 183-185] の話例では、百合若の美しい妻に懸想をした家来たちが、百合若が寝ているすきにイカダにのせて海に流したことになっている。この話例では話の結末に独自の内容がみられ、帰京を果たした百合若が妻と相談して「恩ある島のために、十四、五人の強い大和の人を、この水納島へ移り住ませたという話」だと締め括っている。

百合若にまつわる「伝説」は日本各地に分布しているが、とりわけ分布の密度が濃いのは九州北部の福岡県、大分県を中心とする地域であり、説話の中にも鷹にまつわる奇瑞を説く宇佐八幡宮への信仰がうかがわれる。「百合若説話は、元来は宇佐八幡の唱道文芸としてあったとみてよい。」[島村 1992: 161] という見解が一般的であり、奄美・沖縄への伝播も、これとの関連が想定されている。

#### 4. 小 括

以上、嶺間按司と鳥塚にまつわる「伝説」の内容を概観してきた。前述のとおり、多良間にはこの他にも土原豊見親にまつわる多くの「伝説」を始め、世界的規模で伝承される洪水始祖神話の一例とみられる、多良間の島立由来を説く兄妹婚の伝承、悲劇の女性仲屋マブナリにまつわる「伝説」など、注目すべき話例は多々存在する。本稿でとりあげた二つの「伝説」のうち、嶺間按司の例は他所では「昔話」として語られる内容、鳥塚・百合若大臣の例は他所でも多く「伝説」として知られる内容のものである。これらの話例がどのようにして多良間に持ち伝えられたのか、本稿では伝播の経路に関して詳論することは出来なかったが、いずれにせよ多良間においては、これらの話例は自らの地域社会に根ざしたものであるとして伝承されてきた「伝説」として認識されているのであり、時の経過とともに話の細部にゆらぎを生じるとしても、その価値は今後も変わることはないであろう。

なお本稿で取り上げた「伝説」の記述は過去の文献資料に拠ったものであり、現在の多良間におけるこれら「伝説」の態様に関しては別稿を用意したい。

【参考／引用文献一覧】

本文中にある〔 〕内の数字表記は、引用文献の発行年と、その引用箇所掲載頁数を示す。なお引用文献中の旧漢字は、原則として現行のものに改めてある。

- 稲田浩二・小澤俊夫責任編集 1983 『日本昔話通観』第26巻〈沖縄〉 同朋舎出版  
稲村 賢敷 1957 『宮古島庶民史』 (自刊)  
上江洲 均 1960 「多良間島探訪記」『民俗』2 琉球大学民俗研究クラブ  
嘉手納宗徳 編訳 1978 『〈沖縄文化史料集成6〉 球陽外巻 遺老説伝』 角川書店  
河村 只雄 1999 (1939) 『南方文化の探求』 講談社  
島村 幸一 1992 「百合若伝説」『日本「神話・伝説」総覧』 新人物往来社  
多良間村誌編纂委員会編 1973 『村誌たaram島 一孤島の民俗と歴史一』 多良間村  
多良間村史編集委員会編  
1986 『多良間村史』第2巻〈資料編1 (王国時代の記録)〉 多良間村  
1995 『多良間村史』第6巻〈資料編5 (多良間の系図並に  
勤書・古文書・御嶽・古謡)〉 多良間村  
多良間村役場編 1981 『多良間村の民話』 多良間村役場  
渡好山春好 編 1995 『村の歴史散歩』 多良間村教育委員会  
永積 安明 1977 「沖縄の百合若伝説」『中世文学の可能性』  
中山 盛茂 1966 「多良間の民俗」  
琉球大学沖縄文化研究所編『宮古諸島学術調査研究報告 (地理・民俗編)』  
琉球大学沖縄文化研究所  
福田 晃 1996 「糸満説話の伝承世界」  
立命館大学説話文学研究会編『沖縄・糸満市の昔話』 糸満市教育委員会  
福田晃編／山下欣一・遠藤庄治・福田晃著 1989  
『日本伝説大系』15〈南島〉 みずうみ書房  
宮本常一・山本周五郎・楫西光速・山代巴 監修 1959  
『日本残酷物語』第1部 平凡社  
柳田 国男 1989 (1925) 『海南小記』(『柳田国男全集』1 筑摩書房)  
柳田 国男 1990 (1947) 『口承文芸史考』(『柳田国男全集』8 筑摩書房)  
柳田国男監修／日本放送協会編 1948 『日本昔話名彙』 日本放送出版協会